コラム
歴史に学ぶ

「安姫と又四郎の悲恋物語」

西之表市立図書館長　鮫嶋　安豊

今からおよそ５００年前、浜津脇から立山、安城に至る広大な地域を支配する安城村領主羽生右京という人物がいる。精悍で鹿狩りを好み、今日でも「右京殿の破難」「右京殿間伏」と呼ばれる字名も残る。安城村には、右京の娘（安姫）と浜津脇出身の若い漁師（又四郎）の悲恋物語がある。その概略は「その昔、島を二分した種子島相撲大会が開催され、又四郎は連続優勝するほどの力士で、さらに美男子であった。又四郎は日魚の行商人に扮装して、羽生右京屋敷を訪問する中に、安姫と又四郎は恋に落ちた」と。

羽生家譜には「上の御山と下の御山という神聖な山があり、上の御山には羽生右京夫婦の霊を祀る大樹の取木有り。夫婦の尺骨を宅地大園の西山中に葬りたる験の取木の傍らに厨子を営建たり・(中略)。下の御山は安城右京の一女子色欲の罪あり、右京憤怒のあまり、家臣に命じて、伊和奈の渡瀬（万波）で殺害したまう。然るに密夫人又四郎という者はこの由を聞て、縊死（自殺）す。ともに非業の死、その妄念にや、里村奇妖の事あり。里人、これをあやしみ、此の二霊を崇敬し、この妖を静めんと語り、右京の宅地下の御山の高上の地へ験しの取樹を立て、二霊の妄魂を崇め、岡大神と称号し…(以下略)」。さらに妙泰寺縁起には「不幸な死を遂げた愛娘のため、右京の妻は尼になり、右京は妙泰寺を建立して供養した。」と。２０２０年晩秋、下の御山と思われる山中に、石塔群が発見された。そこは小さな川を渡り、水田趾を越え、竹藪を通り抜けた小高い鬱蒼とした椎の大木の側にあった。石垣も巡らされ、安姫・又四郎の埋葬地の記録と方角も一致した。長享２年（１４８８）の「安姫と又四郎」のお墓に間違いないと確信した。明治１６年、この四霊はこの近くに岡山神社として合祀されている。岡山神社は相撲の神様ともいわれる。（了）

人里離れた杉木立の中の石塔群

中世部会
報告

『西之表市史』の中世部会では、源頼朝が鎌倉幕府を開いた12世紀末から徳川家康が江戸幕府を開いた17世紀初めまでを扱います。この約400年にわたる中世という時代に種子島の歴史は大きく動きました。種子島氏による統治が始まり、その影響力は屋久島をはじめとする周囲の島々へも拡大していきますが、戦国時代の動乱を経て種子島氏は薩摩の島津氏の支配下に組み込まれることになります。法華宗への改宗や鉄砲伝来といった重要な出来事も、この中世に起きました。中世の種子島および種子島氏がどういう存在だったのかを知るために、中世部会では種子島氏と島津氏との関係性を詳しく検討し、市史に記述していきたいと思っています。また、当時の日本の対外関係（外国との関係）のなかで種子島・種子島氏が果たした役割についても考えていきます。鉄砲伝来についてはこれまで多くの研究がありますし、近年では遣明船（日本から中国に派遣された船）に関する研究のなかで種子島についても言及されています。こういった研究成果に学び、市史では中世の日本、そしてアジアの状況を踏まえた上で種子島の歴史を考えていきたいと思います。

＜中世部会長：屋良　健一郎＞

令和３年３月25日発行　第４号　［発行］西之表市［編集］企画課 歴史文化活用係
〒891-3193　西之表市西之表7612番地　電話 0997-22-1111（内 211）FAX 0997-22-0295

西之表市史編さんだより

第4号

『校区史』の調査をご紹介します

榕城校区

大正～昭和初期の様子「曽我どんの傘焼き」と「共立社」

鹿児島の伝統行事「曽我どんの傘焼き」は、鎌倉時代に相模国（現在の静岡県）の曽我兄弟が、父の仇討ちを遂げる際、たいまつの代わりに雨傘を燃やして夜討ちした故事に由来します。西之表でもおよそ百年前にこのイベントが行われていたことが、当時の西町の住民の手記に著されています。

「小学三年生四年生の頃（大正14年頃）、各家庭には破れ傘が少なくとも三、四本はあった。それをもらって集めたのである。五月のある晩に私達は西町の会宅に集まって曽我兄弟の歌を歌って、町を歩き海岸へ出た。（歌詞略）埋立からがんぎに運んだ傘に火をつける。炎は高く天に上る。青年の人達が傘を投げ込むのがこちらからよく見えた。」赤々と燃え上がる炎が空に海に幻想的に映っていたことでしょう。現代の花火大会のように見えていたのかもしれません。単調な日々の生活に変化をつけ、英気を養っていたのではないかと思われますが、導入や廃止の経緯を知りたいものです。

昭和初期のころ地域に「共立社」がありました。詳細は不明ですが、現在の子供会、少年団のようなものでしょう。大人の指導のもと、遠足や磯遊び、野外のゲームなどが行われ、社会生活のルールが育まれていたようです。当時の写真には、「子供はいつもほほえむ」「遠足はたのしかった」「もう皆大きくなってしまった」というコメントも添えられ、子供達への暖かい眼差しが感じられます。

野首集落の「共立社」
昭和９年頃

尾形　公雄（榕城担当）

安納校区

～謎多き「天女ヶ倉」～

軍場の嶽「天女ヶ倉」（標高237.9m）の山頂付近を、里人は昔から「アマメガクレ」あるいは「アマメカグラ」と呼び、特別の場所（聖地）としてきました。そこには直径2間位の巨大な石が2段重ねになっており、その岩の下に神様（日高氏の祖が来島の折、背負ってきたと言われる日の妙見神＝同神とされる天御中主神）を祀ってあります。伝説によりますと、昔、天狗が国上の御崎から南へ巨石を運ぶ途中に眺めの良いここに立ち寄り一休みしたが、出発の際、背負いカズラが切れたので岩をそのまま置き去りにした。その岩の下に何時の頃からか天女が降り立ち、お隠れになった（アマメカクレ）。また、この神様は神楽が好きだったので「アマメカグラ」と言い、いつしか「アマメガクラ」と呼ばれるようになったそうです。現在、この神様は、明治になり合祀された豊受姫神とともに、安納大平の安納神社（天女神楽神社）に祀られています。しかし、頂上には昔の祠が残っており、今でも平癒の神様として参拝する人は絶えません。

天女ヶ倉の巨石

また一説には、この峯は巨石信仰の霊地であったといい、修験道の霊場であったこと、「霞の下」という字名が残ることなどから、阿弥陀ヶ座とも考えられ、天女ヶ倉ではなく阿弥陀ヶ倉ではなかったかとも言われています。

小山田　一郎（安納担当）

立山校区

～武田家と仮屋～

令和２年 11 月、立山集落の旧家、武田家の調査をしていただいた。

「武田家住宅は立山集落の西側の山裾に位置し、昔、御殿様が狩りに出られた際に御仮屋として使用されていたとされる旧家で、その名残として庭先にその場所で「鹿を解いた」とされる芝を張った所が今も残る。減築や改築が繰り返されているが、棟札によると最古の部分の建立は弘化３年１月（1846 年）に遡り、中種子町にある国の重要文化財に指定されている古市家住宅と建築時期を同じくする。（古市家住宅は弘化３年２月）（岩下真奈美氏調査資料参照）。」種子島家譜第１巻に「寛永元年甲子六月八日忠時公、安城村芦野に狩りす。之を「立」と名づく。前夜炬火を以って山野を阻断し、明日馬上鹿を射る。是れ旧章に由るなり。」とある。立山は、昔は種子島々主の「御狩場」（御立）であった。立山の狩りは、島主の下島毎に行われたようで、きわめて大がかりなもので島の士分を二分して上の手は安城の大野を本拠、下の手はここ立山が本拠であった、この場合殿様の宿所としては立山の仮屋が使われたが、後には武田家の上座が使われるようになった。仮屋は、二間四方（四坪）の平木葺で、常在していないため、すぐに立腐れ状態となり、普請はせずに武田家の上座を使うようになった。武田家も将来にわたりこの状態が続くものと考え、茅葺の屋根を御殿様御宿として、瓦葺にして欲しいと普請奉行に願い出（武田家文書（口上覚））、許可を得て瓦葺にした。その後も武田家は仮屋番の役職を世襲し、郷土としての家格をも示した。

旧家でもあり、高齢の方がお住まいで、今後の保存が心配される。

武田家住宅

小倉　良光（立山担当）

住吉校区

～住んで吉～

種子島家譜に気になる一文が有りました。「文化二年八月　米五包を住吉村に与ふ、今茲（ことし）大いに飢労して一島の人民みな救を求む、住吉村も亦飢う、然れども府庫の虚耗を想ひ、相共に草根を食して、救を請はず、ゆゑに其の篤実を賞するなり、」前年の相次ぐ台風、旱魃、蝗害によって、島民は蘇鉄を食べて飢えをしのぐほどの大飢饉に陥っていました。その際に住吉の人々は皆とても我慢して御上からの救済を遠慮した、大変立派な行いに褒賞を頂いたという記述です。しかし、私の個人的な直感と妄想で恐縮ではありますが、「住吉村も亦飢う」と「相共に草根を食して」の部分は怪しいと感じます。こんな事を書くと怒られそうですが、住吉村はそれほど飢えておらず、余裕が有ったので特に救済の申請はしなかった、しかし誉められてしまったので米五包を受け取った、と読めてしょうがないのです。（勿論、御役人が巡回して被害状況は住吉も確認していますので、それなりの飢饉が有ったのは史実です。）何故なら住吉は今でも「住んでよし！すみよし」が校区のキャッチフレーズとなっているように、とても暮らしやすいところだからです。現在小学校が建つ山の北側まで船が入る深い入り江を持つ港、神社勧請の条件となった「海浜に接し風光に富み且神聖なる地域」である御山、農漁の良いバランス、流通においても好位置。住吉村はかなり豊かだったのではないでしょうか。あの十四代時堯の旧宅が有り、十六代久時は家を継ぐまで住吉に暮らしていました。嗣子を護る安全な良地であったことは明らかです。古文書や古い文献から住吉の魅力を探すのはとても楽しく、大いに想像が膨らみます。皆さん、お宅に眠っている謎の古文書はございませんか？是非とも資料収集にご協力ください！

住吉海岸より城ノ山を望む（年代不明）

上妻　文乃（住吉担当）

自然部会

冬の馬毛島を調査しました！

自然部会では、防衛省等の協力を得て、１月 18 日から 22 日にかけて、陸生湿地の水辺を中心とする昆虫、甲殻類、両生・は虫類、海産貝類、植物・植生及び地質の調査を馬毛島で行いました。馬毛島はこれまで 20 数年間公開された記録がないところで、調査が渇望されていたところです。

今回は、植物・植生分野について、紹介したいと思います。

上陸して目についたのは、冬なのに鮮やかな緑の植物が塊になって点々とあること。この植物は、有毒植物のイワタイゲキとハスノハカズラでした。葉を落としたカンコノキは県内のどの地域で見るものより、小枝の棘が鋭く長くなって、シカなどの草食動物を近づけないようにして群落を作っていました。

島の中央部は造成整地され、かつての低木林から草地に変わっています。森林が残っている周辺部は、低木層より下層の林床はほとんど植物が生えていません。崖地に成立するマルバニッケイ群落の中には、崖地が崩壊を起こしているところもありました。これらは、著しく増加したシカの侵入や摂食などが原因の可能性があると考えます。今回の調査で踏査できたところは、島の４分の１程度でした。ドングリをつけるマテバシイやスダジイも見つけましたが、植栽されたものが広がっているのか、それとも在来のものか判別できません。絶滅危惧植物のヒメノボタンを多数見ましたが、タネガシマアリノトウグサは確認していません。冬季の調査は生き物の生育や行動が活発でないため、自然の調査としては不十分です。今後も季節を変え、新たな分野を加え、馬毛島の自然を記録できることを願っています。

調 査 の 様 子

湊川のマングローブは日本の宝！

種子島のマングローブは、太平洋域では自生の北限と言われ、メヒルギ１種でしかも樹高が低いという特徴があります。熱帯性の植物が自然環境と折り合いをつけながら生育地を確保し、独特の形態になっているということで中種子町阿嶽川は平成 27 年に国の天然記念物に指定されました。

それよりさらに北方にある湊川のマングローブにも注目が集まり、今回市史作成調査を実施したところでした。

湊川のマングローブは、阿嶽川に比較すると小規模ですが、種子島でも自生の北限地であり、阿嶽川と同じような樹高の低いものだけでなく、国内でも最高級のメヒルギ群落がありました。マングローブに接する森の中でハマナツメ（絶滅危惧種）やハマボウも 10m ほどに大きく成長したものがたくさんあります。これは、地形的な要因で北西の季節風から守られているからと言えます。また、マングローブ中に絶滅危惧種ハマジンチョウの群落があり、２月ごろ花を多数つけていました。

日本の多くのマングローブ林は、集落から離れたところにありますが、湊川のマングローブは、湊集落に隣接し、集落の一部となって見事な景観を形成しています。湊川では、集落の原風景となり、南国的景観を求めて訪れる人も多く、地域の財産・誇りともなっており、地域では美化活動なども継続的に行われています。マングローブ林は、形態的にも生態的にも特異な南日本を象徴する植物群落ですが、湊川のマングローブは特異的であり、日本を代表する自然の財産と言えます。

この調査報告は、鹿児島県立博物館の研究報告（第 40 号）に掲載され、鹿児島県立博物館のホームページから閲覧ができるようになる予定です。ぜひ、ご覧ください。